

シラバス変更によるプレゼンテーション授業の改善について

－シラバス変更後に実施したアンケート調査をもとに－

林 奈緒子

1. はじめに

本稿で取り上げる「情報活用」は、春学期に開講されている「情報基礎」で身につけた知識、技能を前提として秋学期に開講されている授業である。2007年度より担当してきたこの「情報活用」では、実践を通じてプレゼンテーションについて学ぶことを目標として授業を実施してきた。本稿では、2014年度におこなったシラバスの大幅な変更の経緯と、変更後に履修者に見受けられた変化に触れながら、変更後の現在、履修者が「情報活用」の授業内容をどのように捉えているかについて、アンケート調査の結果にもとづいて報告する。

2. シラバス変更前の授業

シラバス変更前の2013年度までは、プレゼンテーション実施に必要な知識や技能を学びながら、プレゼンテーションの準備を進め、学期末に1回のみプレゼンテーションを実施してきた。テーマは、大学生が授業で取り組む課題であることに鑑み、地方自治体やエネルギー問題など比較的硬いものを取り上げてきた。授業をおこなう中で、変更前のシラバスには、(1)のような利点がある一方、(2)に挙げたような問題点があると感じられるようになってきた。

(1) 変更前のシラバスの利点

① プレゼンテーションのテーマそのものから学べる

そのときどきで社会において関心がよせられている問題をテーマとすることで、取り上げたテーマについて知識を深め自分なりの考えをもつことができる。

② 履修者の負担が少ない

学期中に実施するプレゼンテーションが1回のみであることから、プレゼンテーション実施に向けて授業の中で十分に時間をかけて準備をおこなうことができる。

③ 既習内容の復習や多角的な学習ができる

授業スケジュールに余裕があるため、「情報基礎」で学んだ内容を振り返りながら、プレゼンテーション実施に関わる新しい知識、技能を導入できる。

(2) 変更前のシラバスの問題点

① プレゼンテーションの実施回数が少ない

1 回だけのプレゼンテーション実施では、プレゼンテーション能力の向上が難しい。

② フィードバックが少ない

教員やクラスメートからのフィードバックの機会が限定的であるため、履修者のモチベーション維持が難しい。

③ 授業目標が不明瞭である

プレゼンテーション能力の向上を目標とした授業なのか、テーマに関わる知識を深めることを目標とした授業なのか、授業で目指すものに曖昧さがあった。

以上のような問題点を改善すべく、2014 年度以降の授業では、授業目標をプレゼンテーション能力の向上に絞り込み、授業シラバスを大幅に変更した。

3. シラバス変更後の授業

授業シラバスを変更するにあたって、特に留意したのが以下の 3 点である。

(3) シラバス変更の際しての留意点

① 実施プレゼンテーションの回数を増やす。

② 専攻に関わらず、履修者だれもが一定の関心をもって取り組めるテーマを設定する。

③ アプリケーションソフトに関する新たな知識、技能の導入は、プレゼンテーション実施に直接的に関わる必要最低限のものに限定する。

実施回数を増やすことによって、プレゼンテーションの実施そのものに慣れるとともに、実施したプレゼンテーションにおける問題点、不十分だった点を改善、克服するという過程を通じてより実践的にプレゼンテーション能力を身につける機会が得られる。また、実施回数が増えれば、教員、クラスメートからのフィードバックの機会も増えることとなる。プレゼンテーションの複数回実施を保障するために、取り上げるテーマを平易なものとした。

アプリケーションソフトに関する学習については、2013 年度まで一斉授業によって履修者全員で学んでいた内容を大幅に削り、プレゼンテーションの準備を進める中で必要が生じた際に個別に対応することとした。

プレゼンテーションを複数回実施するにあたって、本授業では利用する道具・手段を変えて同じ内容をプレゼンテーションする「リメイク」という手法を一部でとった。15 コマという限られた授業回数の中で「テーマの決定→情報収集→構成の検討→プレゼンテーション作成→実施」という流れを複数回実施することは容易ではない。内容を変えないことで、履修者の負担も抑えられ、プレゼンテーションの実施に集中できるのではないかと考えて

のことである。また、リメイクという手法を用いることで、実施したプレゼンテーションの問題点、課題を修正して次のプレゼンテーションに臨むことができ、履修者が主体的に学んでいく道も開かれる。

(4) プレゼンテーションリメイクの利点

- ① テーマや対象、構成を検討する負担が少ないため、プレゼンテーションの実施回数を増やしやすい。
- ② 1度実施したプレゼンテーションの不十分な点を顧み、改善をおこなう機会が得られる。

以上のような経緯で、2014年度以降授業の中で4回のプレゼンテーションを実施し、授業終了後にレポートとして文書によるプレゼンテーションの提出を求めている。テーマ、目的、利用する道具などの観点から、それぞれの関係を以下にまとめる。

(5) 実施プレゼンテーションの関係

	方法	テーマ	目的	道具
第1回 CM	P.P.のリハーサル機能を利用したプレゼンテーション	自分の好きなもの、好きなこと	自分の好きなもの、好きなことを具体的な対象に勧める。	P.P.
第2回 プレゼン1)	文書によるプレゼンテーション	自分の好きな食べ物 「食を選ぶ」というメインテーマの下、各自でサブテーマを設定	自分の好きな食べ物を、それを苦手とする人に勧める。	Word
第3回 プレゼン2)	口頭でのプレゼンテーション			P.P.
第4回 プレゼン3)				
第5回 プレゼン4)	文書によるプレゼンテーション		食に関する自らの選択を、具体的な聞き手を設定して勧める。	Word

第1回のCMは、春学期に開講されている「情報基礎」で作成したものをリメイクする課題となっている¹。また、プレゼンテーション1)から4)については、プレゼンテーション1)と2)で、プレゼンテーション3)と4)で同じテーマと目的の下プレゼンテーションを実施する形をとっており、プレゼンテーション2)は1)の、プレゼンテーション4)は3)の、方法と道具をかえたりメイクにあたる。一方で、プレゼンテーション2)で口頭プレゼンテーションを実施した直後に、同じく口頭でのプレゼンテーションである3)でその経験を活かす

¹ 春学期「情報基礎」を履修していない学生の場合は、新たに作成する課題となる。

ことができるよう配慮した。テーマや目的などの内容面では、プレゼンテーション 1)と 2)に比べ、プレゼンテーション 3)と 4)では求められる水準が高く、複数回のプレゼンテーションを実施しながら、より難しいプレゼンテーションに取り組んでいく形をとっている。

(6) プレゼンテーション 1)2)とプレゼンテーション 3)4)の違い

① プレゼンテーション 1)2)

- 食べ物を 1 つ選択すればテーマと目的が決まる。
- 実施時間が 2 分と短い。

② プレゼンテーション 3)4)

- 「食を選ぶ」というメインテーマの下、自らサブテーマを設定し、どのような対象(聞き手や読み手)に何を勧めるかを決めなければならない。
- 説得の根拠として数値データを使用することが必須となっている。
- 実施時間が長い²。

また、それぞれのプレゼンテーションの前後に、実施したプレゼンテーションへのフィードバックや次の実施に向けた準備として、以下のような活動をおこなった。

(7) 各プレゼンテーション前後の活動

授業開始時

- 5 回のプレゼンテーションの説明と授業スケジュールの確認
- プレゼンテーション 1)2)および 3)4)のテーマの提出(暫定版)

CM 課題の提出後

- 評価シートを使った相互評価³の実施

プレゼンテーション 1)の提出前

- CM 課題の投票結果発表
- プレゼンテーション 1)の評価基準の提示

プレゼンテーション 1)の提出後

- 評価シートを使った相互評価⁴の実施

プレゼンテーション 2)の実施前

² 2016 年度は 7 分、2017 年度は 6 分のプレゼンテーションを実施した。

³ クラス全員の CM の中から良かったもの 3 つに投票する。授業担当者である筆者も、評価者の一人として 3 票を投じた。

⁴ プレゼンテーション 1)から 3)では、複数の項目について 2 段階から 4 段階での評価をおこない、これにもとづいて履修者 50%、教員 50%の割合で、各プレゼンテーションの得点を算出した。加えて、「自由記入欄」を設けてコメントを入力してもらった。

- プレゼンテーション 1)の結果発表と得点、コメントの確認⁵
- プレゼンテーション 3)4)のテーマと構成の提出（決定版）
- プレゼンテーション 2)の評価基準の提示

プレゼンテーション 2)の実施時

- 評価シートを使った相互評価の実施

プレゼンテーション 3)の実施前

- プレゼンテーション 2)の結果発表と得点、コメントの確認
- プレゼンテーション 2)の自己評価⁶
- プレゼンテーション 3)の中間発表⁷

プレゼンテーション 3)の実施時

- 評価シートを使った相互評価の実施

プレゼンテーション 4)の提出前

- プレゼンテーション 3)の結果発表と得点、コメントの確認
- プレゼンテーション 3)の自己評価
- プレゼンテーション 4)の評価基準の提示

上記以外に、プレゼンテーションの種類や構成に関する説明、見やすい文書やスライドを作成するためのポイントの例示、数値データの提示方法の説明や実践、プレゼンテーション 4)作成に向けた模擬課題の作成などを織り交ぜながら、授業を進めている。ここ数年「情報活用」の履修者数は減少傾向にあるが、履修者数が少ないことで、プレゼンテーションの準備の様々な段階で、個々の状況に合わせて個別的なアドバイスができるという一面もある。

4. シラバス変更による効果

新しいシラバスにもとづいて授業を実施して数年が経過したが、シラバス変更の前後で履修者の様子に顕著な違いが見受けられる。旧シラバスでは、プレゼンテーション実施の機会も少なく、テーマ自体が難しかったことから、半期の授業を履修する間に履修者に目だった変化は感じられなかった。授業スタート時から論理的思考を得意とし、情報収集能力も高い、いわゆる基礎学力が高い履修者が、プレゼンテーションの出来もよく、高く評価する傾向にあって、授業を実施する中で、履修者のもつ力や意欲が変化していく様子はあまり実感

⁵ それぞれの得点と他の履修者および教員からのコメントをまとめ、メールにて送信した。

⁶ 口頭プレゼンテーションである 2)と 3)は、実施翌週の授業で、プレゼンテーションを撮影した動画を各自で視聴させ、「良かった点」「改善すべき点」をまとめ、自己評価として提出させた。

⁷ プレゼンテーション 3)のサブテーマ、目的、対象、構成などを他の履修者に説明する。説得の根拠として、どの場面でどのような数値データを用いるかを具体的に示すことも求められる。

できなかった。意欲的に取り組む履修者はシラバス変更前も少なくはなかったが、プレゼンテーションの面白さや難しさを実践的に学び、楽しみながら主体的に課題に取り組んでいるというには足りないものであった。

一方、シラバス変更後は、扱うテーマも比較的平易なものであり、仮に実施したプレゼンテーションがうまくいかなくても、次のプレゼンテーションで挽回するチャンスが与えられている。また、少人数のクラスで相互評価をおこなったり、意見交換をしたりする機会が増えたことで、履修者同士に信頼関係が生まれ、切磋琢磨しながら楽しんで課題に取り組む様子も見られるようになった。以下に、シラバス変更後に感じられた効果を列挙する。

(8) シラバス変更による効果

- ① 楽しんでプレゼンテーションが実施できている。
- ② クラスの雰囲気も明るく、いい意味でのライバル心や連帯感が見られる。
- ③ 複数回のプレゼンテーション実施によって、過去に実施したプレゼンテーションの課題を改善し、よりよいものにしようという意欲が高まった。
- ④ より多くのプレゼンテーションを目にすることで、自主的、主体的に学んでいく様子が見られる。
- ⑤ テーマが易しい分、構成や利用するデータの選択、見やすさに配慮したスライドデザインなど、プレゼンテーション全体に幅広く目配りできるようになった。

授業を実施する側では、このような効果を実感しているが、授業を履修している学生たちは現在のシラバスをどのように捉えているのだろうか。そこで、2016年度、2017年度の履修者を対象として、質問紙によるアンケート調査を実施した。以下で、アンケートの回答にもとづいて、履修者が現在のシラバスをどのように捉えているか、授業で何を学び、どんな問題点が残されているかについてまとめてみたい。

5. アンケート

アンケートは、2016年度、2017年度の2年にわたり、「情報活用」を履修した学生を対象に、授業の最終日に実施した。アンケートは質問紙によるもので、A4用紙に両面印刷したものを配布し、無記名で回答してもらった。2016年度は21名、2017年度は25名、計46名の回答が得られた⁸。なお、質問紙は末尾の資料に示すとおりである。

⁸ 質問紙は表裏の両面あることを伝えて協力を依頼したが、裏面を記入せずに提出した履修者が数名いた。また、回答を任意とした質問で回答が未記入の場合もあった。回答数にばらつきがあるのはこのためである。

5.1. 各プレゼンテーションについて

まず、質問 1 から質問 3 の回答の分布を確認してみたい。質問 1 では CM およびプレゼンテーション 1) から 3) について、「もっとも楽しく取り組めた」ものを、質問 2 では「もっとも難しかった」ものを、質問 3 では「もっとも勉強になった」ものを 1 つ選んでもらった。

(9) 質問 1 から質問 3 への回答

	質問1	質問2	質問3
1.CM	14	5	2
2.プレゼン1)	3	3	1
3.プレゼン2)	12	3	5
4.プレゼン3)	17	35	37
計	46	46	45

表から、いずれの質問でもプレゼンテーション 3) を選んだ履修者が最も多いことがわかる。プレゼンテーション 3) はサブテーマや目的の決定から聞き手である対象の選択、構成の検討にいたるまでを履修者に委ねており、準備期間も最も長く、実施時間も 7 分あるいは 6 分とボリュームがあった。中間発表など準備の過程で壁に突き当たる者も少なくなく、多くの履修者にとって間違いなく「もっとも難しかった」プレゼンテーションであると予測された。実際、選択理由として「何かを紹介するんじゃなくて、食を選ぶというのが難しかった。対象を決めるのも難しかった」「論理的に考えたり、相手をどう説得するかが難しかった」「根拠となる数値データをどのように活かすかが難しかったです」など課題の難しさを挙げる回答が半数を超えた。

一方で、質問 3 で 8 割、質問 1 で 3 割を超える履修者がプレゼンテーション 3) を選択していることから、プレゼンテーション 3) は履修者に肯定的に捉えられていると見ていいだろう。質問 3 でプレゼンテーション 3) を選択した理由として、「テーマから内容まで全て調べる量が膨大だったため」のように準備段階でテーマについて学んだことを取りあげたもの、「見やすいグラフの作り方やまとめ方を知ることができたから」のように数値データの扱いについて学んだことを取りあげたもの、「明確な根拠を探しながらプレゼンを組み立てるのが大変だったから」「情報を吟味して、なおかつわかりやすく伝えられるような工夫が必要だったから」のように説得型のプレゼンテーションにおいて根拠を上げて聞き手を説得することからの学びを取りあげたものが目立ったが、授業中に実施する最後のプレゼンテーションとして「今までやってきたことの集大成というのもあるが、自分がこの授業でどれだけのものが身についたか確認できた」ことを理由とする意見も見られた。これは、質問 1 でプレゼンテーション 3) を選択した理由にも見られた傾向であり、選択理由として「最初

からプレゼンをつくっていて達成感があった」「今までやってきたことをふまえて、どう改善したり、どう工夫するか、いろいろ考えたから」「本当にしんどかった。けど、やりがいは感じられたし、初回に比べ、成長を感じた」「大変だった分、やりがいがあった。終わった時の達成感が一番あった」のように、達成感、満足感を挙げる履修者が多かった。プレゼンテーション 3)は最も難しかったプレゼンテーションであったが、それ故に多くのことを学び、努力に見合った達成感、満足感が得られたようである。

質問 1 において次に多く選択されている CM については、「自分の好きなものを扱うので、意欲も楽しさも一番だったから」「色んなアニメーション機能など使って楽しかった」などの意見が挙げられた。CM はその後続くプレゼンテーションのウォーミングアップの意味で取り入れているが、十分にその役割を果たしているようである。

5.2. プレゼンテーション実施前後の活動について

続いて、プレゼンテーション実施前後の活動について尋ねた質問 4 への回答を確認していこう。質問 4 では以下 1)から 7)の活動について、履修者のプレゼンテーションをより良いものにするために役立ったかどうかを、「1. 役立たなかった」「2. あまり役立たなかった」「3. やや役立った」「4. 役立った」の選択肢から 1つ選んで答えてもらった。それぞれの質問について、「1. 役立たなかった」を 1点、「2. あまり役立たなかった」2点、「3. やや役立った」3点、「4. 役立った」4点として平均を求めた。

(10)質問 4 への回答

1) 各プレゼンテーションの評価基準が事前に示された	3.63
2) 他の履修者が実施したプレゼンテーションを見た	3.74
3) 自分が実施したプレゼンテーションの得点が配布された	3.67
4) 他の履修者からのコメントが配布された	3.87
5) 教員からのコメントが配布された	3.96
6) 中間発表で出席者からの質問、意見を聞いてそれに答えた	3.46
7) プレゼン2)、プレゼン3)実施後に自己評価をおこなった	3.59

ポイントが高かったのは、5)および 4)で、教員からのコメントや他の履修者からのコメントがプレゼンテーションをより良くするために役立ったと評価されている。次に 2)が続く、他の履修者のプレゼンテーションが手本となったり時には反面教師となったりしていることが伺える。質問 4 でなく、他の質問への回答になるが、「他の人のプレゼンをみれて、新しい発見が多くありました」(質問 1 の理由記入欄)「他の人が注意されていたことを自分のプレゼンの参考にした」(質問 5 への回答)などの意見も見られた。

一方で評価が低かったのは、中間発表での質疑応答、意見交換の効果であった。中間発表

では、プレゼンテーション 3)について、どのようなプレゼンテーションを予定しているかを他の履修者に向けて説明するが、この段階でプレゼンテーションの骨格ができていない者や、根拠として求められている数値データが用意できない履修者も少なくない。加えて、これまでのプレゼンテーションに比べて難しい課題であるため、中間発表を聞く他の履修者からプレゼンテーションの本質に関わるような質問やアドバイスが出にくいという側面もある。中間発表を授業全体の中でどう位置づけるか、プレゼンテーション 3)の実施に向けてより有意義なものにするにはどうすればよいか、今後の課題といえよう。

あわせて質問 5 で、質問 4 に挙げた項目以外にプレゼンテーションをより良いものにするために役立ったことがあるか尋ねた。自由記入方式のこの質問に対する回答を、その内容から授業の中での「教員からの支援」、他の履修者からの支援や関わり合いなど「他の履修者からの支援」、「その他」の 3 つに分類し集計をおこなった⁹。

(11) 質問 5 への回答 (集計)

教員からの支援	15
他の履修者からの支援	6
その他	5
計	26

「教員からの支援」のほとんどは、教員による個々の履修者に対する個別的なアドバイスを取りあげたものである。これ以外に、想定していなかった意見も見られたので、以下でいくつか紹介したい。

(12) 質問 5 への回答

- プレゼン直後のコメント（「教員からの支援」「他の履修者からの支援」）
- プレゼン後の評価で必ず良い点、直す点を両方必ず挙げさせてくれた所。（「教員支援」「他の履修者からの支援」）
- テレビなどでの情報番組 先輩方の話（「その他」）
- 他の人が注意されていたことを自分のプレゼンの参考にした。（「その他」）

口頭でおこなうプレゼンテーション 2)と 3)の実施時には、評価シートを入力するだけでなく、発表者以外の履修者を指名して質問を促し、「良かった点」「改善すべき点」について

⁹ 1つの回答を「教員からの支援」「他の履修者からの支援」「その他」のいずれかに分類するのではなく、内容から複数に該当すると判断したものもある。例えば、「プレゼン直後のコメント」は「教員からの支援」「他の履修者からの支援」の双方に該当するものとして扱った。

コメントするよう求めている。また、授業担当者である筆者自身も、1人1人に良かった点、改善が必要な点をコメントしているものの、評価シートに「自由記入欄」を設けていることから、その意義については疑問も感じていた。しかしながら、プレゼンテーション実施直後のフィードバックは印象にも残りやすく、その後のプレゼンテーション改善にとって有効であると気づかされた。

5.3. プレゼンテーションの評価方法について

プレゼンテーション 1)から 3)では、相互評価を実施し、評価の半分を他の履修者が担う。この評価方法を望ましいと思うかどうかについて尋ねた。

(13) 質問 6 への回答 (集計)

1. 望ましくない	0
2. あまり望ましくない	1
3. やや望ましい	7
4. 望ましい	33
計	41

履修者 50%、教員 50%という配分での評価方法は概ね妥当なものと思われている。その理由についても記述を求めたが、「4. 望ましい」「3. やや望ましい」を選択した履修者の多くが「多くの人の評価をとり入れることで、より公平な評価になると感じたから」のようにより多くの評価者から評価を受ける方が偏りがなく公正である、「経験のある先生と、生徒という多数の意見が組み合わせられて丁度良いと思う」のように立場や経験などが違う教員と学生の双方の評価があった方が望ましいと答えている。興味深いものとして、「先生だけでなく周りからも評価が入ると思うとやる気がでる」のように、モチベーションアップに言及した回答や、「自分のプレゼンを他の人が真剣に見てくれるようになると思うから」のようにプレゼンテーションを見聞きする側の姿勢への影響に触れた回答が見られた。

これに対して、「3. やや望ましい」「2. あまり望ましくない」と答えた履修者の意見として、教員の評価の割合がもう少し高くてもいいというもの（2名）が見られた一方、教員の力が強すぎるというものも（1名）あった。また、「今回は特にないが、特定の生徒に対してまわりからの悪意があるかもしれないから」という回答には、思ってもみなかっただけに驚かされた。そういった可能性を排除するためにも、これまで以上にクラスの雰囲気づくりに向けた配慮が必要だと改めて考えさせられた。

評価に関して、質問 7 では自らのプレゼンテーションが正当に評価されたと考えているかどうかを尋ねた。評価の方法が肯定的に捉えられていたことと関連するだろうが、38名のうち30名が「4. そう思う」、8名が「3. ややそう思う」を選択しており、履修者の多く

が自らのプレゼンテーションが正当に評価されたと捉えている。

5.4. 教員の取り組みについて

続く質問 8 では、授業担当者である教員の取り組みについて尋ねた。以下の 9 つの項目について、十分におこなわれていたものに○を、不十分だったものに×をつけるよう求めた。

(14) 質問 8、質問項目

- 1) 授業開始時に授業スケジュールを明示する。
- 2) 実施する各プレゼンテーションについて丁寧に説明する。
- 3) 講義は、プレゼンテーションの準備、実施に役立つ内容を取りあげる。
- 4) プレゼンテーション実施前に評価基準を明示する。
- 5) できるだけ多くの履修者のプレゼンテーションを見る機会をつくる。
- 6) プレゼンテーション実施後は、迅速なフィードバックをおこなう。
- 7) 履修者のテーマや内容に合わせて、個別に相談、支援をおこなう。
- 8) 各履修者が主体的に活動できるように、過度の介入はおこなわない。
- 9) 履修者同士が信頼関係の中で楽しく学べる雰囲気をつくる。

○を 1、×や無印を 0 として、項目ごとに平均を求めた。

(15) 質問 8 への回答 (集計)

1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)
0.95	0.98	0.98	1.00	1.00	0.95	0.95	0.88	0.93

概ね高い評価を得たものの、その中で 8) の得点の低さが目立つ。8) は 7) と、ある意味相補的な関係にあるが、履修者の主体性を重んじつつ、個々の履修者がその都度抱える問題を解決する手助けとなるにはどのような支援が望ましいだろうか。今後の課題としたい¹⁰。

5.5. 履修者の希望と感想

質問 9 では、授業に望む点、改善してほしい点を尋ねたが、任意に回答を求めた質問だったため、回答率は 29.3%にとどまった。得られた回答をその内容から「要望あり」と「要望なし」に分類して集計したところ、半数が「要望あり」、半数が「要望なし」であった。「要

¹⁰ アンケートは 2 年にわたって、計 10 クラスで実施した。うち 2 クラスは履修者が 1 名のみクラスであった。この 2 名はいずれも質問 8 の 8) で×と回答している。履修者が少ないクラスでいかに履修者の主体的な活動を担保するかが特に難しいところである。

望あり」に分類された回答が多かったのは、「少しつめこみすぎな時期もあった気がします」や「説明が早くてついていけない時があったので、新しいことを教える時はゆっくり教えてほしい」「最後のプレゼンが1番大変だったので、もう少し時間があると嬉しいです」のように時間的なゆとりの無さに言及したものであった。プレゼンテーションを複数回実施するため、授業スケジュールそのものにあまり余裕がないだけでなく、構成の検討やスライド作成など、授業時間外で求めた作業も多く、履修者の負担は小さくなかった。講義や履修者の活動について優先順位をより明確にし、優先順位の低いものを思い切って取りやめ、優先順位の高い活動に時間を充てることも検討すべきかと思われる。

最後に、質問 11 の自由記入欄の記述を確認しておきたい。質問 9 に比して回答率は高く、65.9%の履修者がなんらかのコメントを寄せてくれた。「ありがとうございました」といった授業終了時の教員に対する挨拶を除くと、最も多かったのが学習成果に言及した記述で、回答の 39.02%がこれに触れている。「春学期よりもとても濃い内容の授業でパソコンの技術やプレゼンの技術も多く学べて良かったです」「1年間を通して、それまでほとんど1人で扱えなかったパソコンが使いやすいと感じられるようになりました」などの記述が見られた。次に続くのは、授業の大変さに言及したものの、授業の楽しさに言及したもので、ともに回答の 21.95%が何らかの言及をおこなっている。前者については、「途中、くじけそうになったこともありましたが、何とかここまでやってこれました!」「自分にとって内容はすごく難しいものでしたがついていくために必死で頑張りました」のような記述が、後者については「先生は改善した方が良い点はもちろん、良かった点もいっぱい見つけて教えてくれるのでどれだけ大変でも楽しくやれました」「人が少ない分、他人と話し合うことができたのでものすごく楽しかったです」といった記述が見られた。自由記入欄で示された、とても大変だったが、楽しく取り組んで、多くを学んだという認識は、質問 1 から質問 3 における回答の選択理由の記述と一致するところである。

6. まとめと課題

2014 年度以降、授業の目標をプレゼンテーション能力の向上に絞り、履修者のモチベーションと主体性を高める意図で、より平易なテーマで 5 回のプレゼンテーションを実施するシラバスへと大幅な変更をおこなった。2016 年度、2017 年度に実施したアンケートの回答を見ると、新しいシラバスによる授業は概ね肯定的に受け止められていると考えられる。

授業開始時に授業シラバスについて確認するとともに、シラバスに盛り込まれている各プレゼンテーションについても説明し、初回授業でシラバスとは別に詳細な授業スケジュールを示している。また、履修者が少ないことで、プレゼンテーション準備の段階では、個別に相談や支援をおこなうことが可能であり、プレゼンテーション実施後のフィードバックにも時間をかけることができる。履修者とのコミュニケーションが増えたことで、授業実施者である教員の意図への理解も深まり、クラスの雰囲気も意欲的に学習を進められるも

のに変わってきた。授業で取り上げるコンピュータ、アプリケーションソフトに関する知識や技能は相対的に少なくなっているが、楽しく単位が取得できる授業でないことは履修者アンケートの回答が示すとおりである。

アンケートへの回答全体をとおして特に印象に残ったのは、自らが実施したプレゼンテーションに対する他の履修者や教員からのフィードバックが、プレゼンテーションの実施や改善におけるモチベーションの向上に大きく寄与しているという点である。本授業では主に、①プレゼンテーション準備段階での問題解決に向けた個別支援、②プレゼンテーション実施時における口頭での評価、コメント、③プレゼンテーション実施後に配布する評価、コメントという3つの方法でフィードバックを実施した。どの方法がもっとも効果的かは、個々の履修者の性格やそのときどきの状況に拠るところが大きいだろうが、それぞれの方法のメリット、デメリットを具体的に考察するとともに、より効果的なフィードバックのあり方を検討していきたい。

さらに大きな課題としては、プレゼンテーション 3)の実施に向けた中間発表の位置づけと方法の改善が挙げられる。漠然とどのようなプレゼンテーションを実施するかを説明させていたのでは、学習効果、履修者の満足ともに得られないということだろう。

また、多くの履修者がプレゼンテーション 3)においてサブテーマの選定と構成の決定、利用する数値データの収集の段階で悩んでいることから、この段階でより具体的な支援が求められていることも明らかとなった。履修登録をしているものの最終授業まで履修継続に至らない学生は、その多くがプレゼンテーション 3)の実施前までに出席しなくなっている。このことから、プレゼンテーション 3)は履修者にとってこちらで想定している以上に難しいものと捉えられていることが推測される。

最後に、少人数クラスへの対応が挙げられる。1名から数名のみの履修者の場合には、他のクラスと合同でプレゼンテーションを実施し、相互評価をおこなっている¹¹。上述したとおり、履修者の人数が少ないことのメリットも多いものの、1名から数名のクラスでは、意図せずとも教員が介入する度合いが高くなる。協調的な雰囲気づくりに成功したクラスでは、時に助け合い、時に競争し合いながら、様々なやり取りを通じてお互いを高め合っていく姿が見られる。履修人数に起因する問題は教員の側だけで解決できないだけに、同じ授業を履修しながら学び合う機会が得られない履修者の存在にもどかしさを感じる。

挙げられた課題には、すぐにも改善できるものもあれば、そうでないものもあるが、改善できるものから取り組んでいきたい。

¹¹ 文書によるプレゼンテーションはもとより、口頭でのプレゼンテーション実施でも撮影した動画を見せるとともに、評価シートによる評価、コメントの交換などを実施している。

資料：

情報活用授業アンケート

授業改善に向けて、皆さんの率直な意見を聞かせてください。

質問 1 この授業では、ここまで 4 回のプレゼンテーションを実施しました。もっとも楽しく取り組めたプレゼンテーションはどれですか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. CM 2. プレゼン 1) 3. プレゼン 2) 4. プレゼン 3)

それはなぜですか。理由を教えてください。

質問 2 この授業では、ここまで 4 回のプレゼンテーションを実施しました。もっとも難しかったプレゼンテーションはどれですか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. CM 2. プレゼン 1) 3. プレゼン 2) 4. プレゼン 3)

それなぜですか。理由を教えてください。

質問 3 この授業では、ここまで 4 回のプレゼンテーションを実施しました。もっとも勉強になったプレゼンテーションはどれですか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. CM 2. プレゼン 1) 3. プレゼン 2) 4. プレゼン 3)

それなぜですか。理由を教えてください。

質問 4 プレゼンテーションおよび実施前後の活動について質問します。それぞれ次の活動はあなたのプレゼンテーションをより良いものにするために役立ちましたか。

1) 各プレゼンテーションの評価基準が事前に示された

1. 役立たなかった 2. あまり役立たなかった 3. やや役立った 4. 役立った

2) 他の履修者が実施したプレゼンテーションを見た

1. 役立たなかった 2. あまり役立たなかった 3. やや役立った 4. 役立った

3) 自分が実施したプレゼンテーションの得点が配布された

1. 役立たなかった 2. あまり役立たなかった 3. やや役立った 4. 役立った

4) 他の履修者からのコメントが配布された

1. 役立たなかった 2. あまり役立たなかった 3. やや役立った 4. 役立った

5) 教員からのコメントが配布された

1. 役立たなかった 2. あまり役立たなかった 3. やや役立った 4. 役立った

6) 中間発表で出席者からの質問、意見を聞いてそれに答えた

1. 役立たなかった 2. あまり役立たなかった 3. やや役立った 4. 役立った

7) プレゼン 2)、プレゼン 3)実施後に自己評価（自分のプレゼンの視聴）をおこなった

1. 役立たなかった 2. あまり役立たなかった 3. やや役立った 4. 役立った

質問 5 あなたのプレゼンテーションをより良いものにするために役立ったことが他にあれば、教えてください。

質問 6 プレゼンテーション 1)から 3)では、教員（50%）と他の履修者（50%）があなたの実施したプレゼンテーションを評価しました。この評価方法を望ましいと思いますか。

1. 望ましくない 2. あまり望ましくない 3. やや望ましい 4. 望ましい

それはなぜですか。理由を教えてください。

質問 7 各プレゼンテーション実施後に示された得点、コメントを見て、あなたのプレゼンテーションは正当に（正しく）評価されたと思いますか。

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. ややそう思う 4. そう思う

質問 8 この授業では、授業担当者は以下の点に意識的に取り組みました。十分におこなわれていたものに○を、不十分だったものに×をつけてください。

- () 授業開始時に授業スケジュールを明示する。
- () 実施する各プレゼンテーションについて丁寧に説明する。
- () 講義は、プレゼンテーションの準備、実施に役立つ内容を取り上げる。
- () プレゼンテーション実施前に評価基準を明示する。
- () できるだけ多くの履修者のプレゼンテーションを見る機会をつくる。
- () プレゼンテーション実施後は、迅速なフィードバックをおこなう。
- () 履修者のテーマや内容に合わせて、個別に相談、支援をおこなう。
- () 各履修者が主体的に活動できるように、過度の介入はおこなわない。
- () 履修者同士が信頼関係の中で楽しく学べる雰囲気をつくる。

質問 9 この授業に望む点、改善してほしい点があれば、具体的に教えてください。

質問 10 この授業では「食」をテーマにプレゼンテーションを実施しました。今後授業でプレゼンテーションを実施する機会があれば、どんなテーマを扱ってみたいですか。いくつでも、自由に教えてください。

質問 11 自由記入欄（自由に何でも書いてください）